

令和 7 年 1 月

日本科学未来館イベント「こどもからみる不思議世界探求」
にご参加いただいた皆様へ

2024 年 12 月 7-15 日に上記イベントにご参加いただき、誠にありがとうございました。今回のイベントでは約 70 名のお子さんとその保護者の方に参加協力をいただきました。こどもの発達に関する貴重なデータを得ることができましたこと、心より感謝いたします。

ここでは石川の担当した「時間の長さ、どう感じる？」というテーマの心理学実験について、基礎的なデータ解析が終わりましたので、全体の傾向について報告します。

研究実施者：石川光彦（一橋大学）

E-mail: mitsu.ishikawa@r.hit-u.ac.jp

研究概要 あなたが街中を歩いているとき、すれ違いざまに人と視線が合った場面を想像してください。このような場面では、一瞬目が合っただけにもかかわらずドキッとするかと思えます。アイコンタクトは、私たちの日常的なコミュニケーションにおいて非常に重要な役割を果たします。本研究では、アイコンタクトが子どもの時間感覚に与える影響について検討しました。

これまで、成人を対象とした研究では、アイコンタクトが時間感覚を変化させることが示されています。例えば、西洋文化圏での研究では相手と視線を合わせることで注意が引きつけられ、時間が短く感じられることが報告されています (Burra, & Kerzel, 2021)。一方で、東洋文化圏の成人では時間を長く感じさせる可能性も示唆されています (Ren et al., 2023)。本研究では、日本人の子どもの時間感覚に疑似的なアイコンタクトがどのように影響するのかを明らかにすることを目的としました。さらに、アイコンタクトの影響は文化や人種によって異なる可能性が指摘されています。そのため、日本人と白人の顔画像を用いて、アイコンタクトの文化的要因についても併せて検討しました。

参加者には、画面に提示される顔画像を見て「ながい」または「みじかい」と感じた時間感覚をキーボードを使って回答してもらいました (図 1)。実験は日本人と白人の顔画像がランダムに交互に提示されました。顔画像は正面を向く (アイコンタクト条件) またはそっぽを向く (そっぽを向く条件) の 2 種類がありました。呈示時間は 1000ms、1650 ms、2300 ms、2950 ms、3600 ms の 5 種類ありました。練習の時には、短い時間として 1000ms、長い時間として 3600 ms 提示していました。本番で、ちょうど中間の 2300 ms 間顔が提示された際に、子どもが時間を長く感じるか短く感じるかによって、子どもの時間感覚を検討する課題となっていました。



図1. 実験に用いられた課題例。正面、またはそっぽを向く顔画像に対して提示時間を評価してもらった。

結果 子どもが評定した割合について条件ごとに比較したところ、顔画像の人種によって時間の感じ方が異なることがわかりました。具体的には、日本人の顔画像が提示された場合、白人の顔画像よりも「短い」と感じる傾向が見られました (2)。一方で、アイコンタクト (正面を向く視線) とそっぽを向く視線の違いについては、特に大きな影響は確認されませんでした。また、ちょうど中間の 2300 ms 間顔が提示されたときに、子どもは短いと判断した割合が小さくなっていました (約 30%)。ちょうど中間の提示時間であるため、提示時間を正確に捉えられている場合には、長いと判断する割合と短いと判断する割合が 50%ずつになることが想定されます。そのため、この結果は、子どもが時間を長く感じやすいというバイアスのため見られた結果であることが考えられます。

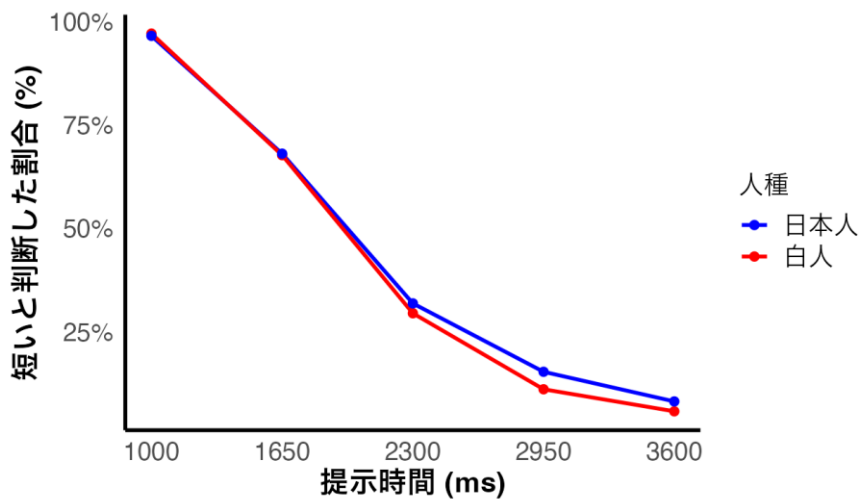


図2. 各提示時間でそれぞれの人種顔の提示時間を短いと判断した割合。

本研究結果は、6歳から12歳までのお子さんのデータの平均値となっていますので、今後は大人と比べてどのように時間間隔が変わるのかなど、発達的な変化についても解析を行っていきたいと思います。人種による時間感覚の違いは、文化的背景や社会的経験が時間感覚に影響を与える可能性を示唆しています。このような研究は、子どもの社会的相互作用やコミュニケーションの発達を理解するうえで重要な知見を提供します。